

IV 家庭教育支援活動 の実践事例

◆ 県内家庭教育支援活動事業一覧	175
◇ 近江八幡市	176
◇ 甲賀市	179
◇ 湖南市	180
◇ 高島市	181
◇ 東近江市	184
◇ 日野町	185
◇ 竜王町	186
◆ 報 告	188
「地域に根ざした家庭教育支援の在り方について(報告)」	

平成24年 学校・家庭・地域の連携による教育支援活動促進事業
 県内家庭教育支援活動事業一覧

○部会、研修会

【部会の開催 年間3回】

	日付	内 容
第1回部会	6月26日	・協議(テーマ:地域の家庭教育支援の取組を活性化するための仕組みを整備する)
第2回部会	11月6日	・現地視察(近江八幡市)、協議(テーマ:地域に根ざした家庭教育支援のあり方)
第3回部会	1月11日	・協議(テーマ:報告書「地域に根ざした家庭教育支援のあり方」)

【家庭教育支援に関する研修会 年間3回】

	日付	講師	内 容
第1回	7月11日	高木和久氏	学校・家庭・地域が協働で子どもの育ちを支える
第2回	10月25日	鈴木秀一氏	子どもを理解し、子ども同士のつながりを創造する指導者の関わり方について
第3回	1月24日	熊谷慎之輔氏	三事業合同研修会、事例報告

○教育支援活動

【学習講座】

	市町名	実施 学校区数	幼児期 講座	学童期 講座	思春期 講座	父親向け 講座 企業出前 講座	親子参加 行事	その他	計
1	近江八幡市	10	3	7					10
2	甲賀市	12		1			14		15
3	高島市	16				4	4	1	9
4	東近江市	9	9	5			1		15
5	日野町	5	14	5	1	3	1		24
6	竜王町	2					2	4	6

【地域人材の養成】

	市町名	講座数	対象者	養成後の活動の場所
1	近江八幡市	5	家庭教育支援コーディネーター	・主に学校における相談活動や研修会の企画 ・関係機関や家庭と連携して、問題の解決を図る
2	湖南市	1	地域教育活動支援者	家庭教育支援チームにおける活動
3	高島市	2	地域家庭教育アドバイザー 団塊の世代、シニア男性等	・グループワークの進行役 ・学校や家庭、地域での子育てボランティア

【支援チーム組織化】

	市町名	人数	年間活動 日数	主な活動内容		
				学習機会のコーディネート	相談対応	家庭訪問による支援
1	近江八幡市	10	300 (延べ)	○	○	○
2	湖南市	18	59	○	○	○

1 【ねらい】

子育てで悩む保護者の一助となる教育相談、講演会、座談会などを開催し、子育てへの不安や悩みを解消する。



2 【概要】

＊日時・場所・対象・参加者数・講師等

5月30日(水) 岡山コミセン 4名

保護者同士による座談会

(10/11・10/18・12/18にも開催)

6月8日(金) 桐原東小学校 PTA 50名

講師 中江亜希子さん

6月18日(月) 武佐小学校 PTA 8名

座談会助言者 富永澄代さん

7月17日(火) 桐原小学校 PTA 6名

座談会助言者 川端典子さん

(1月30日にも開催)

10月17日(水) 島小学校 PTA 他 50名

講師 川崎孝雄さん

11月6日(火) 老蘇小学校 PTA 40名

講師 内田玲子さん

11月21日(水) 北里小学校 PTA 110名

講師 谷口着太郎さん

11月22日(木) 桐原東小学校 PTA 10名

座談会助言者 岡田さよ子さん

12月13日(木) 馬淵小学校 PTA 10名

座談会助言者 桂田陽子さん

1月18日(金) 安土小学校 PTA 32名

講師 服部正彦さん

1月25日(金) 八幡小学校 PTA 名

講師 小林美保子さん

3 【参加者の感想】

・子育てで日々悩むことが多いが、話を聞いて、少し余裕を持って子どもを見ていく大切さを感じた。

・他の保護者と話せることは色々な情報や考え方もわかるのでとても良い。話しておられたことも取り入れて子どもに声をかけていきたい。

・ありのままの子どもの姿を受け入れることの大切さと難しさを深く感じました。

・今まで、自分は何も子どものためにできていないと思っていたが、そうではないということが分かって安心したと同時に自信を持つことができた。

・家で毎日を思い起こすと、大きくなるにつれて、子どもが自分で考えて行動する場面を増やすことが大事だと思った。

・かしまると話せないけど、一緒におやつをつくりながらだと知らないうちにいろいろしゃべっていました。

・常にいい母親ではいられないが、子どもが安心できる母親でいたいと思った。



4 【事業の成果と今後の課題】

コーディネーターを中心に家庭教育支援活動の取組を行って2年目になる。昨年度の反省に立ち、講演会だけでなくサロン形式や座談会等、保護者が参加しやすいようにそれぞれの実態に応じ工夫して実施することができた。その一方で、本当に来てほしい悩みを持つ保護者の参加が難しいのが課題でもある。全体を対象とする講演会とともに、悩みを持つ保護者が来校したり、相談したりしやすいようにさらに工夫を重ねていくとともに、そのような保護者の掘り起こしを、学校・地域と連携しながら地道に行っていく必要がある。

また2年目を迎え、家庭教育支援の取組の周知が一定できたと感じるが、さらにその輪を広げていきたいと考える。

1 【ねらい】

地域課題や現在の家庭教育の課題を経験上での理解に留めるのではなく、研修を通して、より客観性を持った視点で現状を見ることができる力をつけたい。また、さまざまな課題に対して適切な方法や関係機関との連携、人材の紹介と発掘等ができるよう、必要な知識と技能を身につけさせたい。

家庭教育の向上に必要な講座や研修のあり方を計画し学校やPTAにも提案できる力をつけることをねらいとする。

2 【概要】

* 日時・場所・対象・参加者数・講師等

第1回近江八幡市家庭教育推進協議会
(7月30日 18:00~19:50 15名
市役所)

第2回近江八幡市家庭教育推進協議会
(11月15日 18:00~20:10 15名
市役所)

第1回家庭教育支援コーディネーター研修会 (7月10日 11:00~12:00 10名
市役所)

第2回家庭教育支援コーディネーター研修会 (9月27日 10:00~11:30 10名
市役所：話題提供・助言者 岡田さよ子さん・藤井美智子さん)

第3回家庭教育支援コーディネーター研修会 (11月6日 13:30~15:00 11名
老蘇小学校：県部会員との意見交流)



3 【講座の企画運営で工夫した点】

- ・ 事業実施2年目となり、コーディネーターの学校配置数も増えたため、コーディネーターの力量アップとともに、力量差が広がらない様に取り組んだ。
- ・ 情報交換や取り組みの交流を行う中で、学校間での温度差やコーディネーターの抱える問題点を出し合い、方向性や取組重点を確認した。
- ・ 家庭教育推進協議会との連携を図り、指導助言と支援の強化に努めた。

4 【参加者の感想】

- ・ 取り組み交流や情報交換により、自分だけが悩んでいるのではないことが分かり、前向きになれた。
- ・ 家庭教育推進協議会からの指導助言により、方向性が見えてきた。
- ・ 率直な意見や考えが聞けてよかった。



5 【受講者の今後の活動について】

- ・ 地域での家庭教育や子育てに関する課題をさらに明らかにし、取り組みの実践を深める。
- ・ 学校と連携しながら、子育てに悩む保護者の掘り起こしと相談活動などの支援の強化に努める
- ・ コミュニティセンターなど、地域との連携を深め、家庭教育支援の活動の輪をさらに広げる。

1 【家庭教育支援チームの構成】

- ・地域コーディネーター
- ・子育てリーダー
- ・民生委員・児童委員
- ・PTA役員

2 【活動の範囲】

八幡小学校	馬淵小学校
島小学校	北里小学校
岡山小学校	武佐小学校
桐原小学校	安土小学校
桐原東小学校	老蘇小学校

3 【活動範囲の児童数】

八幡小学校	857名	馬淵小学校	182名
島小学校	109名	北里小学校	301名
岡山小学校	298名	武佐小学校	193名
桐原小学校	460名	安土小学校	534名
桐原東小学校	515名	老蘇小学校	132名

4 【家庭教育支援チームの活動概要・特色】

- ・校内家庭教育の情報を収集する。
- ・PTA、教育相談担当教師に情報を伝え、既存の事業に反映させる。（講演会、学習会・座談会などの開催、適切な関係機関の紹介など）
- ・情報を学校・「家庭教育推進協議会」など連携機関に伝える。
- ・校区のコミュニティーセンターの子育てサポーターとの連携を行う。
- ・悩み相談への対応を行う。



5 【活動の成果】

- ・家庭教育支援チームの人員、活動範囲が増え、家庭教育支援に対する重要性の認識を市内全体に広めることができた。
- ・同じく家庭教育を支援する体制が、市内全体に徐々にではあるができてきた。
- ・相談活動やサロンの活動を始め、子育てに悩む保護者への取り組みが、各校の実情に応じて取り組むことができた。
- ・家庭教育推進協議会との連携を進めることができた。



6 【今後の課題】

- ・2年目を迎え、支援チームの人員、活動範囲が広がったものの、保護者・一般教員へのコーディネーターの役割の周知がまだまだ不十分であった。周知の徹底をさらに図っていく必要がある。
- ・支援活動に協力していただける地域の方をどんどん増やしていく必要がある。

7 【チーム員より】

- ・2年目となり、学校やPTAの協力のもと少しずつ取り組みを始め、参加者はまだまだ少ないながら、継続的な活動に取り組めた。
- ・学習会等の企画を進めたが、子育てに悩む保護者や課題を持つ保護者の参加がなかなか得られなかった。次年度はさらに工夫をしていきたい。
- ・訪問や相談活動には取り組めなかったのが課題である。

1 【ねらい】

保育園や幼稚園の保護者参観日などの機会に、親が子育ての中で、家庭教育の大切さ、子どもとのふれあいの楽しさなどを見つめ直す場として実施。また、小学4年生を対象に命の大切さを体感し、家族との絆を深める講座を開催。子どもの成長と共に、親自身も少しずつ成長していける講座を提供する。

2 【概要】

■保護者を対象にした家庭教育学習

- ・ 11月30日（金）雲井保育園（49人）
演題「絵本を楽しもう」
講師 市居 みか さん（絵本作家）
内容 絵本作家から見た絵本の楽しみ方
絵本の読み聞かせ（実演） など



・その他、園長、保護者会の希望により内容や講師をコーディネートし実施した。

9/4 甲南南保育園、11/14 甲南北保育園、1/21 油日にこにこ園、2/8 甲南希望ヶ丘保育園、2/14 大原にこにこ園、2/19 土山にこにこ園

■小学生を対象とした家庭教育学習

- ・ 11月30日（金）甲南第三小学校
- ・ 12月19日（水）山内小学校
- ・ 2月5日（火）多羅尾小学校
演題「10歳になった君達へ
～育ちゆく体とわたし～」
講師 市岡 恵子 さん（助産師）

内容 妊婦体験スーツの妊婦体験や出産体験。
新生児人形のお世話体験。
家族からの「手紙」を読んで、「生まれ

てくれてありがとう」「生んでくれてありがとう」の返事を書く。

備考 保護者は当日参観していないが、子どもが生まれた日を思い返し、10歳に成長したわが子をふり返りながら手紙を書く事で、生まれてきてくれたことを改めて喜べる機会となった。



3 【参加者の感想】

- ・親の顔色、言葉ひとつで子どもは笑顔にも曇った顔にもなる。親の感情で子ども達にまで影響させてはいけないと思いました。
- ・忘れてしまっていた気持ち「生まれてきてくれてありがとう」を思い出せました。

（甲南南保育園保護者アンケート）

- ・ぼくは、自分の命「キセキ」をだいじにまもります。ありがとう。
- ・今日のにんぶ体験で、自分が大人になったら子どもをうむまでママといっしょのことで育てなあかなあと思ったら、やっぱりママはたいへんやなあと思いました。
- ・わたしを産んでくれてありがとう。手紙を読んで感動したよ！

（甲南第三小学校4年生「親への手紙」）

4 【事業の成果と今後の課題】

今年度から始めた小学生を対象とした家庭教育学習では、保護者は「手紙」というかたちでの参加であったが、ゆっくり時間をかけて綴る思い出は、より効果的であったように思う。保育園・幼稚園は昨年度に比べ、講座の希望が少なかったため、保護者への啓発により努めたい。

1 【事業の概要、特色等】

平成 12 年度菩提寺小学校において、教室に入れない子に寄り添うため、当時の民生委員さんを中心に「ほっとルーム」を立ち上げ、ボランティア活動がスタートした。

その後、人の入れ替わりはあったが、現在は 3 名で週 3 回活動を続けている。

子どもの対応としては、1 対 1 の形で活動している。

今年度は、子どもだけでなく、親を対象に支援活動も始めた。

2 【事業の成果】

子どものサポートは、教師との連携で随時スムーズにできている。子どもの言うことに耳を傾け、一緒に活動することで信頼関係を築くことができた。

今年度は、講師を迎え「親子で幸せになる」というテーマで講演を行った。保護者、地域ボランティアの皆さんが参加され、質疑応答も活発に行われた。



学校支援地域本部事業の「苦っこを育てる会」と協力しながら、「苦っこはうす」で『ほっ♪とサロン』を開催した。

(旧用務員宿舎を、ボランティアでリフォームし「苦っこはうす」という活動拠点ができた。)

授業参観後の開催だったが、まだまだ保護者に広報が行き届かなかったようで、参加者はやや少なかった。しかしながら、少人数であったからこそ、参加者からは、日頃思っていることや、聞いてみたいことがたくさん出てきた。

終了後には「思いっきりしゃべってすっきりした。」という声も聞きかされた。

3 【今後の課題】

○子どもたちに寄り添う形を続け充実させるために、もう少し活動メンバーを確保したい。

○『ほっ♪とサロン』をより充実させ、定期的で開催できるようにしたい。

○親を対象の支援をより具体的にする必要がありと考えており、次年度の重点課題とする。

I 妊娠期家庭教育講座

1 【ねらい】

核家族化が進む中で、父親の子育て参画や役割、パートナーとのあり方などについて学ぶことで、父親が積極的に家庭教育や子育てに参画できるようになる。

2 【概要】

健康推進課と協力し、父親の参加が多くなってきた妊婦教室時に、家庭教育講座を開催し、講演とグループワーク（語り合い）を行った。地域家庭教育アドバイザーが、語り合いの進行と教室・講座の補助を担当した。

●日時・参加者数

- 5月13日（日） 27人
- 9月 9日（日） 17人
- 11月11日（日） 10人
- 2月24日（日）

計4回 14時15分～15時15分

●場所 南部・北部保健センター

●対象 妊婦教室参加者

●講師 ファザーリング・ジャパン
副代表理事 小崎 恭弘さん
ファザーリング・ジャパン滋賀の
みなさん



3 【参加者の感想】

（父親）

- ・父親の視点での話がためになった。
- ・みなさん色々な意見があり、子育てに対する気持ちも少しかわった。

（母親）

- ・実際に育児を経験している、現役パパの生の声が聞けて、参考になった。

・夫婦で参加できたし、グループトークではいろいろ聞けてよかった。

4 【事業の成果と今後の課題】

講演と、先輩ママである地域家庭教育アドバイザーが進行する語り合いを通じて、これからの育児の不安を共感し、親になる心構えを育てる学習の機会を提供できた。

今回のように、子育て支援を目的とする各種団体や組織と連携して、取り組みを進める必要がある。

II 親子体験学習事業

1 【ねらい】

学齢期の子どもと保護者が、様々な体験活動を通してふれあうことで、お互いを尊重し合い、より良い親子関係を築きながら、他者との共同生活・活動を通じて、協調性や社会性を育む。

2 【概要】

高島市PTA連絡協議会に委託し、親子で体験学習と食育学習、環境学習に取り組む事業を、夏（日帰りと宿泊を各1回）と冬（日帰りを2回）に開催した。夏の宿泊には、中学生ボランティアが参加して、活動や運営を補助してくれた。

●対象 学齢期（小学生・中学生）の親子

●実施日・参加者数・場所・内容

<夏>

8月2日（木） 21家族61人

8月4～5日（土・日） 22家族65人

高島市今津町 棕川山の子学園

野外調理（鹿肉カレー他）・生きもの観察・テント泊・天体観測など

<冬>

1月14日（祝・月） 5家族16人

1月20日（日） 7家族18人

高島市朽木 朽木いきものふれあいの里

朽木東小学校

郷土料理づくり（猪肉の肉じゃが他）・雪山かんじき体験・丁稚ようかんづくりなど



3 【参加者の感想】

(親)

- ・いろいろな状況で、周りの人と協力する活動をさせたいと思い参加したが、良かった。
- ・自然の中、家族で集団生活をしたことは、すごく貴重な経験になった。

(子)

- ・テントを家族ではるのが大変だった。中学生の人達が手伝ってくれたので、とても助かった。

4 【事業の成果と今後の課題】

親子が協力して、食事づくりやものづくりを行い、子どもとふれあいながら、集団の中の子どもの姿を知り、成長を確かめる機会となった。

子どもたちは、様々な体験や中学生ボランティアの姿から、仲間と協力することや、自分の力でやり遂げることを学んだ。

今後は、地域の人に関わりを増やし、親は地域の人から学び、地域の人には子育てへの理解を深められる工夫が必要である。

Ⅲ 「社会教育（共育）研修会」

1 【ねらい】

子ども社会の現実を知り、家庭、学校、地域が連携し、大人がすべきことを考える機会とする。

2 【概要】

家庭教育支援事業と学社連携・融合推進事業および市青少年育成市民会議、市PTA連絡協議会が合同で開催した。

●日時 平成24年6月16日（土）

13時00分～16時00分

●場所 安曇川公民館ふじのきホール

●対象 小中学校関係者、家庭教育・青少年教育等社会教育関係者等

●参加者数 165人

●内容

・パネルディスカッション

青少年育成や子育て支援関係者、スポーツ少年団指導者、地域の子どもの宿の推進委員が、活動を通して感じる子どもたちの変化や親子の関係、学校とのつながりなどについて討論した。

・講演「今、私たちがすべきこと」

講師 立命館大学産業社会学部

教授 野田 正人さん

3 【参加者の感想】

- ・子どもの本質が変わったのではなく、周りが変わったということを実感し、普段の言動や考え方を見直す。
- ・家庭、学校、地域、全体で子どもを見守り、育てていく。

4 【事業の成果と今後の課題】

この研修会は、学校教育と社会教育が、初めて合同で開催し、子育てや子どもの健全育成、いじめや虐待などの問題について、参加者の共通理解を図ることができた。また、それぞれの立場で、子どもとのかかわりを振り返る機会となった。

今後は、大人たちが子どもの頃の体験を振り返り、子どもたちに伝えていくべきこと、必要なことを話し合い、家庭・学校・地域が連携して、地域ぐるみの子育てに向けた取り組みが行われるよう進めていく必要がある。



I 地域教育力向上講座

1 【ねらい】

退職シニア世代がゆとりの時間を生かし、孫育てや地域参画に対する関心を高め、地域で子育て支援や青少年育成に取り組む人材を育成する。

2 【概要】

●日程 11月21日～1月23日 全8回

●内容

- ①孫育てと地域参画 ②おやつづくり
- ③服装・着こなし術 ④似顔絵描き
- ⑤スマホの使い方 ⑥絵本の読み語り
- ⑦遊びと子どもの育ち
- ⑧子育て事情と祖父母の役割

●場所 安曇川公民館

●参加者数 延べ104人



3 【講座の企画運営で工夫した点】

体験を通じて、楽しく学べるよう、実習を多く取り入れ、実際に役立つ内容や、男性が関心をもてる内容を意識して企画した。

4 【参加者の感想】

- ・自分が楽しくなる、自分みがきが必要で、それが地域で活かされればいいと感じた。
- ・時代の流れと学習の必要を痛感した。子育て、孫育てでは自分の経験が基本になるが、変えてはいけないものと変えなければならぬものを感じる必要を感じた。

5 【受講者の今後の活動について】

受講者には、家庭教育支援チーム「(仮称)地域子育て応援隊」の立ち上げに参画いただき、講座での学習成果を生かして「地域ぐるみの子育て」の推進に、中心的な役割を担っていただきたいと考える。

II 地域家庭教育アドバイザー活動支援

1 【ねらい】

講座修了者が、地域家庭教育アドバイザーとして活動する機会を設け、身につけた知識や力を生かす。

2 【概要】

地域家庭教育アドバイザーが、妊娠期家庭教育講座でグループワークの語り合い進行と、運営の補助を担当した。

●日時・活動人数

5月13日(日) 5人

9月9日(日) 6人

11月11日(日) 2人

2月24日(日)

計4回 13時00分～16時00分

●場所 市内保健センター

3 【活動において工夫した点】

アドバイザーは、妊婦教室と家庭教育講座の全体打合せと、終了後の反省会に参加することとし、事業を企画運営する立場で活動していただくようにした。

4 【語り合いの進行活動の感想】

- ・時間に追われた感じがあった。自分の話ばかりにならないよう、気を付けた。
- ・参加して良かったとの声が多く、こういう機会の必要性を感じた。

5 【今後の活動について】

地域教育力向上講座の受講者と一緒に、家庭教育支援チーム「(仮称)地域子育て応援隊」の立ち上げに参画いただき、今年の活動経験を生かし、相談対応等の親支援に取り組んでいただく。



1【ねらい】

本市では、PTAを中心として親の学びを支援する研修会などが数多く開催されている。しかし、参加者がなかなか集まらないとか、ほんとうに来てほしい人がきてくれないなどの悩みがある。そこでそれらの研修会に無関心の人を、学びの場に取り込めるような工夫がなされた事業を展開し、多様な形態の学習会の実践を蓄え、啓発することを目的とする。

2【概要】

上記趣旨に合った研修会の実施を市内各幼稚園・学校・社会教育施設に呼びかけ、実施希望のあったところに本市の家庭教育支援コーディネーターが調整・支援をすることで事業を実施し、成果を広く報告することとした。

3【実践と参加者の感想】

①祖父母参観を利用した学習会

湖東第一幼稚園では、公立図書館の司書による読み語り子どもたちとともに鑑賞した。そのあと、絵本の大切さを学んだ。子どもたちが本の世界に夢中になっている姿を見た後なので、学習の意欲が高まったようだ。



永源寺幼稚園では、子どもと祖父母のふれあい遊びを通して、自分の孫を愛するとともにまわりの子どもたちも愛することの大切さを学ぶ学習会を開催した。子どもたちの喜ぶ姿に感動して、いろいろな子に関わろうとする祖父母の姿が見られた。一緒に遊べて楽しかったという感想が多かった。

②サロン型の学習会

蒲生北小学校では、教育相談担当の先生が中心となり、授業参観後、気軽に寄れる場所を設定して、子育ての悩みなどを語り合えるサロンを開催した。

③親子参加型の学習会

湖東第一幼稚園では、木製の玩具を通して、親子がふれあう活動を行った。親同士の交流も図れた。

玉緒小学校では、児童書作家に来ていただき、子どもに絵本の世界を紹介してもらった。授業参観としたので親も一緒に学ぶことができた。

④一工夫して広く公募する研修会

箕作小学校では、楽しい講演で有名な講師を招き、参加しやすい雰囲気を作ろうと努力した。また、学習会の内容は、「子育て新聞」としてすぐに発行して、全保護者に配布した。終始笑いが絶えずあっという間に時間がすぎ、学習会に対するイメージが大きく変わったという感想があった。

⑤広報・啓発活動

市内23の幼稚園PTAの研修担当者を一堂に集めて、PTA幼稚園情報交換会を実施した。短時間の学習会と、ティータイムを楽しみながら、語り合いを通した学びあいを体験してもらった。アンケートには、いい話が聞けて、思いも喋れてよかったという感想が多く寄せられた。

各PTAにお願いして、講師情報を集めた。そして、まとめた一覧表を配布した。役員になった方がそれを見て、講師を選定することも多々あったようだ。

4【事業の成果と今後の課題】

PTAと連携して進めたが、社会教育施設や各種団体、さらに地域の人から家庭教育を進める動きが出てきており、いろんな所で気軽に学べるように各団体・施設が連携して取り組むことが大切である。

この2年間は、主に形態についていろいろなアプローチを行ってきた。いろんなやり方がそれぞれいいという考察はできるが、今後は、内容やテーマをもって、それを広げるためにどうしていくかという方法を考えていくことも必要である。

1 【ねらい】

幼稚園へ児童を迎えに来られる時間や小学校の就学時健診・一日入学など、保護者が集まる機会に、家庭での子どもとの関わり方、子育てで大切にしたいことなど、子育てや家庭教育について学ぶ場を提供し、家庭での教育力の向上をはかる。

2 【概要】

○幼稚園井戸端学習会

開催日	場所	人数
11月6日	西大路幼稚園	9
11月9日	日野幼稚園(5歳)	7
11月15日	日野幼稚園(4歳)	8
11月26日	南比都佐幼稚園	15
11月28日	必佐幼稚園	26
11月29日	日野幼稚園(3歳)	17
12月6日	桜谷幼稚園	14
12月13日	日野幼稚園鎌掛分園	13

対象：幼稚園に通園している児童の保護者

講師：寺町卓氏

○就学前学習講座

開催日	場所	人数
11月5日	南比都佐小学校	8
11月9日	西大路小学校	12
11月16日	桜谷小学校	12
2月8日	日野小学校	102
2月8日	必佐小学校※	64

対象：平成25年度就学予定児の保護者

講師：寺町卓氏

※必佐小学校のみ早川和彦氏

「共に生きる～へこたれない子に～」というテーマで、子どもと関わるうえで大切にしたい「信頼・安心・自信」という3つの関係づくりと、「話す・聞く・教える・伝える・つくる」という5つの接点、それぞれの家庭で、これだけは大事にしたいという「こだわり」を持つことなどを中心に講演会を開催した。

幼稚園井戸端学習会は園児の降園予定時間の30分前に集まっていたいただき、就学前学習

講座は就学予定児の保護者が集まる機会に講演を行った。



3 【参加者の感想】

参加された保護者からは次のような感想が寄せられた。

- ・体験なども交えての話なので分かりやすかった。3つの関係をつくるのが、子どもが「へこたれない子」になるために大切だと感じました。
- ・講演を聞いて、家で子どもとどのように接しているかを振り返り、少しでも5つの接点を持つようにしたいと思いました。



4 【事業の成果と今後の課題】

乳幼児の保護者が集まる機会を捉えることで、普段は講演会等に参加されない方にも聞いていただくことができている。

しかし、そうした中でも参加されない保護者もあり、参加を促す工夫をしていきたい。

また、広く地域の方を対象に、現在の子育て家庭を取り巻く状況、地域で子どもを育てることの大切さなどについての講座等を開催し、地域も一体となって子育てに取り組める地域づくりに取り組んでいきたい。

1 【ねらい】

- ・子どもたちの夢や希望を育み、親が育つ研修会を開催する。
- ・町内単位PTAが一堂に会して研修会を開催することで、互いの情報交換を行い、地域・関係団体との連携を深めるなかで、地域の教育力の醸成を図る。

2 【概要】

- (1) 日時 平成 24 年 11 月 23 日 (金)
13:00~15:40
- (2) 場所 竜王町立竜王西小学校 体育館
- (3) 対象 保護者、教職員、
スポーツ少年団指導者
- (4) 参加者数 145名
- (5) 主催 竜王町PTA連絡協議会
- (6) 共催 竜王町教育委員会
竜王町公民館
- (7) 内容
 - ① 開催趣旨説明
 - ② 事例発表
「子ども達の生きる力をはぐくむ竜王西幼稚園PTAの取組」
竜王西幼稚園
 - ③ 記念講演
「子ども達の生きる力をはぐくむための家庭の役割」
講師 松田 保
(びわこ成蹊スポーツ大学教授)

10代の体力が生涯の健康に最も大きく影響をしている。しかし、日本の小学生の運動量は、欧米28カ国で最下位である。その原因は、子どもたちの生きる力の欠如、地域社会が機能していない、少子化などが考えられる。そこで、家庭は、生きる力や心を育てる庭として、くつろぎの場としての役割が必要である。悪い習慣を改善し、良い習慣を身につけ、学ぶ身体づくりや自己教育力の向上をめざしていくことが望まれている。そのためには、自己肯定感や有用感、自尊心や自信を育むよう良い点を誉め、ポジティブな働きか

けをする。問題点には、改善を試みることを誉めて、改善するようにするなどの話を具体的に聞くことができた。



(松田 保氏の記念講演の様子)

3 【参加者の感想】

- ・「良い子どもが良い親を育て、良い親が良い子どもを育てる。」と聞き、子育てを楽しみ、子どもの良さをもっと見つけていきたいと思いました。
- ・社会全体で、子育てを支える基盤をつくるが必要と感じました。



(竜王西幼稚園PTAの事例発表の様子)

4 【事業の成果と今後の課題】

町内単位PTAの三役の方を中心に準備や運営、後始末を協力いただき、学力や体力向上における家庭の役割について研修を深める機会となった。この時期小学校の体育館で行うことは、少し寒く、暖房の設備がある方がよかった。また、事例発表、記念講演という形式が続いたので、来年度、内容について検討していきたい。

【その他事業概要】

- (1) 日時 平成24年6月2日(土)
9:00~11:00
- (2) 場所 雪野山とその周辺
- (3) 対象 園児と保護者
- (4) 参加者数 67組の親子
- (5) 主催 竜王幼稚園ならびにPTA
- (6) 共催 竜王町公民館
- (7) 内容
 - ①親子雪野山ハイキング
 - ②草花あそび講師：かわせみグループ

- (1) 日時 平成24年6月23日(土)
10:00~12:00
- (2) 場所 竜王西幼稚園遊戯室・保育室
- (3) 対象 園児と保護者
- (4) 参加者数 80組の親子
- (5) 主催 竜王西幼稚園ならびにPTA
- (6) 共催 竜王町公民館
- (7) 内容
 - ①親子で遊ぼう(体力づくり)
 - ②子ども体験教室(お絵描き)講師：中原今日子氏

- (1) 日時 平成24年10月23日(火)
15:00~16:00
- (2) 場所 竜王西小学校
- (3) 対象 保護者と祖父母
- (4) 参加者数 47名
- (5) 主催 竜王西小学校ならびにPTA
- (6) 共催 竜王町公民館
- (7) 内容
 - ①講演「挨拶することの益について」講師：池田喜久子氏

- (1) 日時 平成24年11月10日(土)
9:00~12:00
- (2) 場所 竜王西小学校
- (3) 対象 児童と保護者
- (4) 参加者数 319名
- (5) 主催 竜王西小学校ならびにPTA
- (6) 共催 竜王町公民館
- (7) 内容
 - ①本の読み聞かせ「竜王弓物語」
 - 講師：ポエム
 - ②講演「アラスカフォトライブ」
 - 講師：松本紀生氏

- (1) 日時 平成24年7月14日(土)
19:30~22:00
- (2) 場所 竜王町公民館ホール他
- (3) 対象 保護者、一般住民
- (4) 参加者数 121名
- (5) 主催 竜王中学校ならびにPTA
- (6) 共催 竜王町公民館
- (7) 内容
 - ①講演「中学生の子育て」
 - 講師：福井進氏
 - ②分科会「我が家の子育て」

- (1) 日時 平成24年12月13日(木)
15:30~16:45
- (2) 場所 竜王中学校
- (3) 対象 保護者と学校保健委員
- (4) 参加者数 30名
- (5) 主催 竜王中学校保健委員会
竜王中学校PTA
- (6) 共催 竜王町公民館
- (7) 内容
 - ①講演「思春期に見られる心の変化」
 - 講師：三船直子氏

地域に根ざした家庭教育支援をめざして（報告）

滋賀県家庭教育支援活動部会

1. はじめに

- 家庭教育を支える環境は、核家族による身近な人から子育てを学ぶ機会の減少や、都市化による地域とのつながりの希薄化などにより、大きく変化しています。また、現在、若者の引きこもり、不登校、児童虐待の問題など、家庭と子どもの育ちをめぐる問題は複雑化しています。
- そのような中、平成 18 年 12 月には、教育基本法が改正され、第 10 条に家庭教育について、また社会教育法においても家庭教育に関する新たな規定が追加されるなど、家庭教育を支援することが国や県、市町の責務として明記されました。同時に教育基本法第 13 条には学校・家庭・地域住民等の連携協力についての条項が新たに定められ、社会全体で子どもの育ちを支える環境づくりが求められるようになりました。
- 県ではこれまでの家庭教育支援総合推進事業を引き継ぎ、平成 20 年度より、家庭教育支援基盤形成事業を 2 市 5 町で実施し、家庭教育支援チームによる学齢期における子育て・親育ち講座の実施など全ての親へのきめ細やかな家庭教育支援手法の開発をめざした取組を進めてきました。平成 21 年度には訪問型家庭教育相談体制充実事業を 2 市町で実施し、積極的かつきめ細やかな相談体制の充実を図るための手法の開発を行ってきました。
- 平成 23 年度からは「学校・家庭・地域の連携による教育支援活動促進事業」として、学校支援地域本部事業や放課後子ども教室事業と有機的な連携をめざし、家庭教育支援チームの組織化による相談対応、保護者への学習機会や親子参加行事の企画・提供など、全ての保護者が安心して家庭教育を行うための支援活動を実施してきたところです。
- 今年度は、家庭教育支援事業が新たな枠組みとなり 2 年が経過し、県内の家庭教育支援の基盤を形成するとともに、持続可能な安定した体制の確立が重要な課題となっています。ここに、家庭教育支援活動部会で論議した内容についてその要点を取りまとめましたので、今後の各市町、地域における取組の参考としていただき、地域に根ざした効果的な家庭教育支援がさらに推進されることを切望します。

2. 本事業における取組

（県内における取組概要）

- 平成 23 年度は、近江八幡市、甲賀市、東近江市、日野町、竜王町において、

学校・家庭・地域の連携による教育支援活動促進事業における家庭教育支援活動を実施し、今年度はさらに、湖南省と高島市が新たに加わり、地域の実情に応じた家庭教育支援活動が実施されました。

- 県では、市町担当者やコーディネーター、ボランティア等の資質の向上や情報交換を図ることを目的に家庭教育支援に関する研修会を年間 3 回実施しました。第 1 回研修会では元湖南省教育研究所長の高木和久氏より、学校・家庭・地域が協働して子どもの育ちを支えることの意義や重要性について講演をいただきました。第 2 回研修会では放課後子どもプラン事業と合同で研修を行い、県教育委員会スクールソーシャルワークスーパーバイザーの鈴木秀一氏より、子どもを理解し、子ども同士のつながりを創造する指導者の関わり方についてのお話を伺いました。第 3 回研修会では、岡山大学の熊谷慎之輔氏より、本事業の意味と今後のあり方について御講演いただきました。
- 家庭教育を効果的に推進するための取組を支援することを目的に家庭教育支援活動部会を設置し、2 回の推進委員会、3 回の部会を開催しました。部会では、家庭教育をとりまく地域や学校、保護者や子どもの現状や県内各市町における家庭教育支援の実施状況、近江八幡市における取組の現地視察および意見交流を実施しました。

3. 家庭教育支援を巡る状況

(家庭教育と家庭教育支援)

- 家庭教育とは、父母その他の保護者が子どもに対して行う教育のことです。家庭は家族が共同生活を営む場所であり、団らんや共同生活など愛情に支えられた生活の営みの中で、生活のために必要な習慣を身につけさせるとともに、自立心を育成し、心身の調和の取れた発達を図るものです。これら家庭教育の自主性を尊重しつつ、保護者に対する学習機会及び情報の提供や、家庭教育を支援するための必要な施策を講じることは、国及び地方公共団体の責務となっていますが、施策を講じるにあたっては、行政が各家庭における具体的な教育内容を押しつけることがないように留意する必要があります。

(家庭にかかわって)

- 家庭教育を支える環境は大きく変化し、家庭教育の二極化が問題となっています。教育に関心が高く、様々な教育資源や情報を収集・活用している家庭がある一方で、子どもと十分に接することができない家庭や、経済的にも精神的にも厳しい問題を抱えた家庭も見られます。

- 家庭の価値観の多様化や地域の人間関係の希薄さ等により、学校と保護者が信頼関係を結びにくい状況もあります。地域で孤立している家庭の学校に対する批判的な言動や子どもの問題行動等に、学校が困り果てている現実があります。
- このような場面に対して、親としての役割の未熟さを問題にし、その家庭を批判することに終始する論調が見られます。しかし、家庭や子どもの行動のどこが課題であるかを見ることも大切ですが、同時に、そのことをどのように伝えていくかも大事な家庭教育支援の問題です。
- 家庭教育支援は家庭を叱責するものではありません。いかに家庭がエンパワメントできるように支援し、保護者が事業や様々な活動に参加して、人と人とのつながりを実感してもらうかが大切です。そのためには、厳しい状況に置かれた保護者が思わず参加したくなるような工夫や仕掛けが必要です。

(学校にかかわって)

- 学校は制度疲労を起こしている現実があります。地域の力を結集して、学校を支援するしくみづくりが求められています。まずそのためには、社会状況や社会のしくみを正しく認識し、地域と共に子どもを育てていこうという風土を学校に根づかせることが大切です。
- 地域と連携する学校の取組によって、荒れていた中学校が落ち着きを取り戻している事例が報告されています。しんどい層の子どもたちを地域と学校で支え、全体の学力を伸ばそうという発想が求められています。

(地域にかかわって)

- 地域には様々な団体や人材がたくさんおられます。学校でもない行政でもない地域の団体やNPO等は貴重な存在です。それらの方々に協働して家庭教育支援に取り組んでいただき、同時に自己実現をしてもらうことも大切な視点です。
- 県内では、NPO団体による様々な家庭教育・子育て支援事業が実施されています。例えば、就学前の親子を対象に、大型ショッピングセンターのコミュニティルームを借り、そこを運営している企業とNPOと近くにある大学(学生)とが協働して、「つどいの広場事業」を開催しています。リピーターの姿を見ながら、気になる親は専門家につなぐという地域に根ざした子育て支援を行っています。
- 子どもの居場所づくりとして、身近なところで子どもの集団づくりを目的に、商店街の空き店舗を借りて、子どもたちの放課後支援も計画されている。

ます。

- このような地域での取組について、学校や公民館等はその意義を十分に理解し、積極的に協力する姿勢が求められています。事業消化型の取組ではなく、家庭教育支援を通して人と人がつながれる地域づくりの視点が大切です。

4. 地域に根ざした家庭教育支援について～今年度の取組より～

(地域に根ざした多様な取組)

- 県内市町では様々な形態で家庭教育支援活動を実施しています。本事業では、①「学習機会の効果的な提供」②「地域人材の養成」③「家庭教育支援チームの組織化」の3つのメニューに分類し、事業が実施され、7市町のうち6市町が①「学習機会の効果的な提供」を実施しています。
- 学習講座の開設等による支援は、すべての保護者に対して開かれた基本的な学習や交流機会の提供としての意義があります。しかし、困難な状態のある家庭の参加は厳しく、支援が届きにくい傾向にあります。また、行政主体で実施される場合が多く、予算の関係により事業が終了してしまう懸念もあります。講座に参加できない保護者に対して、セーフティなゾーンをつくっていくことも必要であり、地域のNPOや、福祉施設、大学とも連携して学生も含めた支援する体制を創ることも必要です。
- ある小学校では、「だじゃれグランプリ」という取組を取り入れ、「だじゃれ」を通して親子で意図的に会話を重ね、コミュニケーションを促進させる取組を学校支援地域本部事業と家庭教育支援が連携して実施しています。このような意図的に活動を組み入れることにより、親子のコミュニケーションを促進させる取組も家庭教育支援の一つといえます。

(家庭教育支援チームの事例：近江八幡市の取組より)

- 近江八幡市では、市域の家庭教育支援チームを組織化しています。学校支援地域本部事業に取り組んでいる10小学校に家庭教育支援コーディネーターを配置し、学校・家庭・地域をコーディネートする役割を担っています。コーディネーターは学校や地域での家庭教育の課題やその把握に努め、学校やPTAと連携しながら家庭教育支援に取り組んでいます。その結果、家庭教育支援は学校支援にもなっています。
- 家庭教育支援コーディネーターは様々な立場の人により構成されています。例えば、民生委員、主任児童委員、補導委員などで、それぞれの立ち位置で活動をしています。また、学校とつながりを持つことは地域の児童や保護者と顔見知りになれることにより、トラブルを抱えた家庭があった場合

は、学校と連携して早い対応ができるという利点があります。それぞれのコーディネーターにより自分の強みを生かした取組が進められています。

(コーディネーターとしての活動 「意見交流会」より要約)

- 具体的な取り組みとしては、コーディネーター通信を発行し、コーディネーター目線で気づいたことを綴る取組や学校行事に合わせて、教育相談日を設定し、随時相談を受けることとし、保護者に通知しました。個別に保護者に声をかけて話してみると、みんなが子育てに悩んでいるが、子育ておしゃべりサロンの場を持ってみようかと計画したが、全く応募がなかったこともありました。
- 講演会などに、保護者を呼んで何かしようという活動に対しては、なかなか参加する人が少ない状態ですが、気楽に話ができるように「あっとホームルーム」という座談会を数回行いました。その中で、友達からはじまって、横のつながりができ、その友達の親が参加するようになりました。
- 子どもと親と一緒に活動してはどうかと考え、サツマイモ掘りの体験を行い、そのなかで座談会を行いました。幅広い保護者の参加があり、お互い子どもを育てる親としての話ことができました。保護者が悩みを持ちながら、進んで参加することはしにくいので、親子体験教室的なものを実施し、その時に楽しいことをしながら家庭の話をして、つながりづくりができればよいと考えました。
- 保護司と補導委員をしていた関係で、地域の方から信頼していただけしており、学校の心配な子どもの様子を聞いたなら、地域で声をかけるようにしています。
- 学校支援地域本部事業のコーディネーターを兼ねており、職員室にいると色々な家庭の状況が見えてきます。担任の先生を先頭に、先生を支えるようにして、保護者と学校の間に入って関係をつないでいます。
- 学校と関わりを持ちにくい保護者を地域でほぐす役割をしており、その結果、先生が保護者と関わりを持つことができるようになり、子どもが学校に登校できるようになりました。

(コーディネーターの特長)

- コーディネーターは子どもにとって親にとって評価しない人、一番受け入れやすい存在といえます。学校の教師は評価をする側の立場であって、コーディネーターやボランティアの方々は丸ごと保護者を受け入れる人、評価しない人です。コーディネーターの良さはここにあるといえます。

- コーディネーターが時間やお金抜きにして保護者の相談相手になって、厳しい状況の家庭に関わり、学校が知り得ない内容などを聞いてくれていることもあります。
- 学校支援地域本部事業とコーディネーターを兼ねることで、子どもが「おばちゃん、おばちゃん」と家で話をしているうちに、自然な形で子どもと一緒に家庭に関わるケースもあります。
- コーディネーターの良さは、保護者の近くにおいて、すぐに相談でき、身近で活動しやすい面があります。一方で、時として「どちらの立場に立つか」という難しい問題が生じることもあります。
- 学校に配置されているコーディネーターは、お互いの活動についての情報交換会を求めています。また、時にはコーディネーターと教頭との合同研修をするなどの取組を通して、お互いの意思疎通が必要です。仲間づくりをしておくことが、コーディネーターの持ち味を生かす出発点です。

(行政で考えていきたい課題)

- 今後、コーディネーターの存在は、より一層重要になっていくと思われませんが、その役割等を行政内できっちりと整理することが大切です。行政として、どのようにコーディネーターをバックアップしていくのか、何ができるのかというシステムを整備することが必要です。とりわけ、教育委員会と市長部局とのネットワークが重要です。
- コーディネーターの活動内容や道筋をしっかりと示すこと、活動範囲を整理すること等により、安心してコーディネーターの強みを出すことができます。
- 特に、ケース会議が必要な専門的な分野のレベルと話を聞くだけでよいという相談レベルの対応を整理する必要があります。福祉的支援や精神的ケアの必要な部分は専門家を交えての取組が必要となります。

(学校と考えていきたい課題)

- 行政が申請主義であることに対して、学校は確認主義です。「子どもの様子がおかしい」「何とかしなければ」ということで、家庭訪問を行います。そして、子どもの様子から家庭の状況などもいち早く察知できます。さらに学校に地域のコーディネーター等がいることは、いろんな層の保護者や子どもの変化、様子をキャッチできるシステムづくりにつながると考えられ、そのモデルを創っていく必要があります。
- 近年、学校へ専門的技能を持った支援員等の配置が進められています。しかし、コーディネーターは専門職ではなく、地域と学校をつなぐきっかけ

をつくる人です。学校教育と生涯学習・社会教育が連携・融合し、豊かな教育活動が展開されるよう、会議等でコーディネーターの意義、役割等をしっかりと確認することが求められています。

- 学校の中でコーディネーターが相談できる教員を明確にすることも大切です。その接点を誰がどのように整備していくのかによって、コーディネーターの活かし方が変わってしまいます。コーディネーターの孤軍奮闘ではなく、学校と連携して教員の思いが出てくるようなお互いの関係性が必要です。
- 学校側もコーディネーターと連携することにより、若い教員が厳しい課題を抱えた家庭と向きあう合う力を育てることができるという利点があります。
- 地域と連携する取組が、学校長や担当教員の異動によりなくなったりするのではなく、学校の総体として行われることが大切です。

5. 持続可能な家庭教育支援をめざして

- どのような事業もいずれは終了します。事業の最終段階を見据えて、コーディネーターが地域で貢献するシステムづくりが必要です。コーディネーターとして学びながら、地域に再び戻っていくことにより、地域で寄り添う理解者を増やしていくという視点が重要です。
- 厳しい課題を抱えた人たちと関わり、地域に頼れる人たちが増えていくこと、地域の中でいつでも話ができる存在がいることは地域にとっての財産です。そういう方々が地域のコンビニのように出てくるのが、本事業の価値でもあります。
- 頼れる人たちがコンビニのように地域の中に存在することで、人と人との関係性をつくり替え、何を大事にするまちなのかという雰囲気を作っていくこととなります。その時に、しんどい思いを持っている保護者が自分の気持ちをはじめて語れるようになります。長い期間を見通しながら、まちづくりの展望を持って、地域に根ざした家庭教育支援に取り組んでいきましょう。